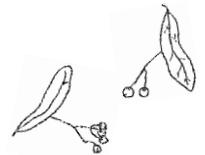


第二十回

葉っぱは誰が作ったのか

十一月の終わりの頃、園庭の菩提樹をめぐっての出来事。



菩提樹の葉は独特な形をしている。その返った羽の様な葉、その下に虫の足のよひなものがついている。その先に種がある。その葉で遊ぶと「子ども」菩提樹の葉を知らなかった先生が声をかけた。「どうやって作ったの?」
「もうひとりの子どもの工作ではない。これは笑い話だが、それを踏まえてもなお、問いの余地はある。あんな形状を誰が作ったの? どうしてあんな形なの? 風の強いその日、菩提樹の葉は旋回しながら飛び立っていた。それを見て「モーリン」コンピュータ「みらい」とか「飛んで行く種をばいばいかな」とか、目の前「起つてくるよ」感動しながら、推測したり仮説を立てたりと知性をぶら下げてくる様子。感性と理性がなごまかになって、それがかわらなくなった。ほのぼのとした様子もまた。

その様子を報告してくれた先生いわく、彼の言うことは「たしかに理論的なんだけど、夢がこぼれている」。これまた適切な評である。

次の日もその男の子は葉っぱの虜(こ)のこ)になって、数人の子どもたちと共に、たくさん集めて形を比較しながら飛ばしてみながら研究している。こんな研究的な遊びから出してきた言葉は「うた」。

「この種は、空が飛ぶたぶんこの形になった」

菩提樹の葉はなぜあんな形なのか。そんなふうな形に誰が作ったのか。この問いに対して、右の子どもは「種は一つの空になった。かっこの」

「ローパなら、誰が作ったか」という問いの答えは「神」であったろう。むしろ、世界のあらゆる不思議の打ち止めを神と



呼んだと言ってもいいだろう。ひとは問いを持ちたい。その強さをあまり持たない。答えを与えられて問いが閉じられた時、安心する。わからないという暗闇が、無限という得体のしれないものに引きずられて、そこからかき消えたい。

「か」ニ「エ」が言出した「神は死んだ」。

それなら私たちは器極の打ち止めを何に見出すことが出来るのか。それを見出せないならば現代世界は「リズム」におおわれたい。リズムになる。

旋回して種を飛ばすのは、メーテルリンクの「花の知恵」にならうと言えば「木の知恵」と言えるだろう。木は脳みそもないのに知恵なんかあるわけがないと思っただろうか。木という個体に知恵はないにしても、様々な工夫がなされるその知恵や力はどこからくるか。それは「自然」の知恵だと言えよう。つまり、それはどんな風なもので、どんな意思や知恵を、どのように持っているのか。

目がみるのにはない。目という器官を通して見るのにはない。「生命の飛躍」という、視覚的生命が物質の中に切り込んでいった時、目という器官が出来る。そういう、意志とか形なきいのちの方を根本にして、そこから形をとりえる見方もある。それは上記の園庭の見方に似ている。

科学がいつも正解を提供するのでもなくテクノロジーも万能ではない。宗教の神話は、人間の勝手な作り話ではない。画者はそもそも同じ土俵に立つことは出来ない。そういう画者間の勝敗などについてはあきらめよう。

科学的な、世界のメカニズムの解明と、宗教的な、世界の根底の解明とは共存できることが望ましい。両者は互いに補完し合っている。それは可能であった。幼児教育は国語や理科が分かる前の総合教育である。そこには科学と宗教も別れなごころがある。



視線の先には飛来する菩提樹の葉

2 学期終わりの園風景



おへやでも跳び箱 さくら組 オルガン弾き合ってほほえましい



倒れている
ピーターパン。
踊る水の妖精。

2012/12/11



ピーターパンの劇が大ブームの
ちゅうりっ組。記憶の確かさ
にも驚きますが、表現力の豊か
さには舌を巻きます。



赤ちゃんおぶってお母さんごっ
こ。さらに、手を後ろに回し、
前掛けを上手に結びますよ。



生き物とおつみあうすみれ組
かめが冬眠できるような
寝床を作ります。

うさぎをだっこ
ふかふかのとりこ



幼児教育は足髀だ！ 雑巾かけはいいですよー

↙ちゅうりっ組最速？ ↗たんぽぽ組さんも挑戦 これが意外に上手くて
足髀、腕が鍛えられる。バランス感覚養われる。生活習慣身に着く